愛知県立芸術大学 陶磁専攻開設 30 周年記念
「全部見せます！愛知芸大の器」展
――陶磁専攻の軌跡――
30th Anniversary of Ceramics Course ：
The UTSUWA Collection at Aichi University of the Arts

川　上　真由子
KAWAKAMI Mayuko

It was the 30th an anniversary of the establishment Aichi University of the Arts Ceramics Course in 2019. Ceramics Course was founded for the purpose of advanced academic considerations, research, production and creation of ceramics, including the design field, in close contact with local industries on April 1, 1989. It started with three teachers and ten students: Professor Masahiro Mori, Associate professor Ryoji Koie and Shinya Kato. Currently, six faculty members, visiting professors, and many other part-time instructors are teaching undergraduate and graduate students. There are over 370 graduates including undergraduate and graduate students.

The University has a collection of various ceramic works from Japan and overseas for the purpose of contributing to education. At the same time, it collects the works of excellent graduates and graduates.

In this paper, I will examine the trajectory of the ceramics course from the opening to the present, and also investigate the ceramic works possessed by the University.

はじめに

美術学部デザイン・工芸科陶磁専攻は、新しい元号令和に変わった 2019 年、開設から 30 周年を迎えた。奇しくも昭和から平成へと移り変わった 1989 年 4 月、地場産業に密着し、デザイン分野も含めた陶磁器の高度な学術的考察・研究と制作・創造を目的として、陶磁専攻は産声を上げた。当初は、森正洋教授、鯉江良二助教授、加藤伸也助教授の 3 名と 10 名の学生から始まり、現在では 6 名の専任教員と客員教授、その他多くの非常勤講師が学部生・大学院生の指導にあたっている。卒業生は学部生、院生合わせて 370 人を超え、陶芸家や陶磁器デザイナーとして活躍したり、後進の育成に携わっている者もいる。2019 年 4 月からは、また新たな視点で陶磁器の可能性を見出すカリキュラムも取り入れ、より広い視野を持った次世代の人材を育成することを目指している。

本学では、教育に資することを目的とし、国内外を問わず、多様な作品を蒐集している。これを本学では、教育参考品と呼び、陶磁器作品についても、専攻開設時から同様に収蔵している。それ

と共に、優秀な卒業生・修了生の作品の収蔵も行っている。2018 年 3 月末時点で、陶磁（セラミックデザイン系）69 件、陶磁（陶芸系）10 件、陶磁資料 54 件、そして、2018 年度までの卒業生・修了生の作品 27 件、合計 160 件を収蔵している。

本稿では、専攻開設に至るまでの資料を中心に、専攻への聞き取りなども含め、開設から現在に至るまでの陶磁専攻の軌跡を考察するとともに、本学が所蔵している陶磁資料についても整理していく。なお、2019 年 5 月 14 日から 6 月 5 日まで、本学芸術資料館にて開催した展覧会「愛知県立芸術大学 陶磁専攻開設 30 周年記念「全部見せます！愛知芸大の器」」において、本稿で調査した内容を紹介した。また、展覧会では、収蔵作品以外にも本学にゆかりの深い方々の作品の展示も行った。

1. 陶磁専攻の開設までのあゆみ

陶磁専攻は、1989 年 4 月、音楽学部音楽科器楽専攻管打楽器コースと共に、本学創立後、初の新設専攻として開設された。

本学が立地する愛知県長久手市は、古くから陶磁器生産が盛んな瀬戸市に隣接している。また、この東海エリアには、瀬戸と同じく六古窯にも数えられる常滑、その他にも美濃や多治見、四日市など、全国有数の窯業の産地を擁している。こうした環境の中で、本学創立時に陶磁専攻がなかったことが、むしろ不思議なくらいである。

本学に残されている資料によると、陶磁専攻新設の要望を受け、1983 年 12 月の臨時教授会において「陶芸科」の設置について話し合いが行われた。「伝統と新しい陶芸との二本立とし、幅広く行うこと」という設置目的のもと、科の増設が進められることとなった[1]。開設までの流れとして、1984 年頃から調査等が行われ、1986 年に施設の建設、1987 年開設を予定していたが、実際には 2 年遅れての開設となった。

まず、「陶磁専攻」という名称が如何に決定されたかについてみていく。前述の通り、当初、「陶芸科」を設置することで提案がなされ、「陶芸専攻」という名称での開設を目指していた。では、なぜ「陶芸」や「工芸」ではなく「陶磁」が使用されることになったのだろうか。1985 年 1 月の「陶芸専攻設置準備委員会記録」によると、専攻名の変更が話し合われ、陶芸専攻から陶磁専攻にすることが了承されている。変更に至るまでの過程について、資料は残されていないものの、以下のような理由があげられていた。「「陶磁」には、ニューセラミックスという科学的分野も含まれ領域が広く、さらに広い視野に立ち将来に向けて愛知芸大のカラーを出せる」ためとし、「伝統陶芸だけでなく新しい分野の創設を目指した」という[2]。

さらに、1970 年代から 80 年代にかけては、工芸の分野にデザインという概念が定着し始めた時期とも重なる。日本で「デザイン」という言葉が使われるようになるのは、1950 年代に入ってからである。余談になるが、本学では、1966 年の創立当初からデザイン専攻があったことは、特筆すべきである。なお、本学のデザイン専攻は、当初、美術学部美術科に属していたが、陶磁専攻が開設されると同時にデザイン・工芸科に再編された。

デザインという言葉が一般的でなかった時代、デザインは工芸の一部とされていた。1887 年に開校した東京藝術大学の前身東京美術学校では、1896 年、後にデザイン科となる図按科を開設。

東京藝術大学へと統合されてから美術学部は、絵画科・彫刻科・工芸科・建築科・芸術学科の 5 科になり、1975 年に美術学部工芸科を工芸科とデザイン科に改組している。京都市立芸術大学は、1971 年に、工芸科のデザイン専攻をデザインコースとし、工芸コースに陶磁器専攻を新設した。金沢美術工芸大学は金沢美術工芸専門学校として、美術科、陶磁科などを有し、1946 年に設立。その後 1955 年に金沢美術工芸大学となり、美術学科（絵画専攻・彫刻専攻）と産業美術学科（商業美術・工業意匠）の 2 学科で始まり、1965 年には、商業美術、工業意匠を商業デザイン専攻、工業デザイン専攻に変更し、工芸・繊維デザイン専攻を新たに増設した。本学は、設置準備の段階で、東京藝術大学、京都市立芸術大学、金沢美術工芸大学の調査や視察を行っており、主要な芸術大学が、相次ぎ工芸とデザインについての新たな方向性を示したことも、陶磁専攻への名称変更にも少なからず影響していると思われる。

次に、開設に際し、陶磁専攻の理念や方向性についてどのような議論が行われてきたか考察する。現在、大学案内の陶磁専攻の項目には、「「用の美」を教育理念とし、暮らしの中の陶磁、建築陶磁など分野を越えて陶磁素材の可能性と表現の自由を探求すべく、陶磁の基本を積み上げながら学生個々の能力を研鑽し、次代をになう人材の教育に全力をあげて取り組んでいます。」[3] とある。また、陶磁専攻の中には「陶芸コース」と「セラミックデザインコース」の 2 コースがあり、3 年次からそれぞれのコースに分かれて制作を行う。「陶芸コース」は、湯呑から大皿、大壷までのロクロ成形と鉄絵、染付、色絵などの絵付けを習得する。また土や釉薬の研究では、藁を焼いて釉薬を作り、薪窯を焚いたり、作陶における基本を学ぶ。一方「セラミックデザインコース」は、セラミック産業に貢献するデザイナーの育成を目指す。学生は、デザインの基礎、造形、陶磁技法などの基礎課題を学びながら、個々の創造性を啓発し、今日の生活空間における陶磁器の新たな可能性を考えるとする。

開設当時は、現在のように大学案内などの広報物を作成していないため、開設を公に知らせる資料は非常に少ない。また、ちょうど開設する 1989 年は、本学の法隆寺金堂壁画模写展示館の開館した年でもあり、開設年の前後で本学が紙面に取り上げられることとして展示館の話題が多く、陶磁専攻を開設するという記事はほぼ見当たらなかった。それでも小さいながら 1988 年 6 月 23 日の夕刊には「瀬戸市を中心とした陶磁器業界から、陶磁器に関する高度な教育の場を設置するよう要望が出、陶磁専攻を新設することにした」[4] と、1989 年 2 月 16 日の朝刊[5] には、地元の陶芸科である加藤と鯉江が陶磁専攻の教員として選ばれたことを中日新聞は伝えている。また、実習棟が完成した際には、陶磁関係者らを招いて式典を行い、当時の建畠学長が陶磁専攻を「芸術とセラミックス産業の双方の拠点としたい」[6] と語ったとある。

では、実際、開設に向けてどのような議論がなされたかを見ていく。まず、1983 年ごろに作成された資料では、現在の理念や方向性と少し違う、「新しい陶磁器デザインの高度な学術的研究と、それらを担う若い人材の育成は、今、まさに望まれている。伝統陶芸の継承は、いうに及ばず、更に広い視野に立って、世界に通用し得るセラミック・デザインの中心的場を持つことは、愛知県立芸術大学に不可欠の命題といえよう。」[7] と、セラミックデザインを柱とする専攻を目指していた

ことが分かる。一方で、開設にあたっての問題点については以下のように触れている。

1. 陶芸県愛知であるため、単に現状に即応するだけでなく、将来の陶芸ないし窯業産業の発展に寄与しうる人材の育成と研究に対応しうる組織と施設を持たねばならぬのではないか
2. 陶芸作家の育成と、窯業産業関係に進出する人材の育成と、この二つをどのような理念の下で、どのような関係に置き組織づけるか
3. 窯業産業関係では、その中のどの分野を担当する人材を育成するのか
4. 陶芸をそれのみで将来とも存続させるか、それとも将来は工芸の一分科とする見通しで計画するか
5. 何にせよ既設の美術学部の組織に、単に陶芸を付加するだけでは、新規の目的を達成しえぬばかりでなく、むしろ混乱と既設の組織の内容弱体化をきたし共倒れになる恐れさえある。従って陶芸を新設ことにより既存の組織や施設も何らかの程度での変更ないし拡張を余儀なくされると思われるので、総合的なヴィジョンの立案が必要であろう
6. 伝統工芸なるものの大学教育に対する理念の確立[8]

このような議論を経て、1984 年の「愛知県立芸術大学陶芸専攻設置構想」では、「わが国近代産業の中核をなす愛知県において、特に、陶磁器産業の占める位置は、その歴史的観点からも、重要、且つ注目に値すると考えられる。これらの見地からも、次代へ向っての幅広いセラミック産業の高度な学術的研究と、それらをになう若い人材の育成は、いま、まさに望まれていると確信できる。愛知県立芸術大学においては、愛知県の日本における地理的条件と、現状をも充分に考慮した上で、伝統的陶芸の継承はいうに及ばず、世界的視野からも、トータルな意味でのセラミックデザインの中心的な場を設置することは、必要不可欠な命題と考えている。」[9] とする。この時点でも、特にセラミック産業やセラミックデザインに資する人材の育成が念頭に置かれていることがわかる。

生産動態統計調査によると、1949 年に愛知県の陶磁器生産量は、全国シェアが約 46％、2 位の岐阜県が 19％ほどで、この東海地区だけで日本のほぼ 7 割近く生産していたことになる。1970 年ごろまでは高度経済成長に呼応するように、愛知県の陶磁器生産数量は、堅調な伸びを見せていたが、本学の陶磁専攻について議論されている頃には、輸出不振や、国内需要の急激な減退などにより低迷する。一方で、ファインセラミックなどの工業製品としての陶磁器は 1984 年ごろから急速に発展している。

さらに、日本だけでなく、国際的に通用し得る広い視野を持ち、かつ客観的な思考の中にも個性をもった（陶芸家）（陶磁器デザイナー）として、陶磁界のリーダーとなる人材の育成も目指していた。従来の陶芸教育と異なるカリキュラムとして①他専攻との融合をはかる、② ID（インダストリアルデザイン）的陶磁も重要な特色の一つとする、③アート的なコースも ID を理解し、ID 的コースもアートを理解させる教育が必要と考えていた[10]。そのために、1986 年には陶磁専門委員として、瀬戸で活躍する陶芸家加藤、栄木正敏を学外専門委員として迎えることとなる。当時、デザイン専

攻の客員教授であった森などにより、設備や機材の選定、カリキュラムについての検討が行われ、他の専攻の授業や教員たちとも横断的に関わりが持てるよう提案している。特にデザイン分野との関わりは重視され、一時デザイン棟とひとつづきになるような陶磁棟の建設が計画されていた。

以上のような検討が進められ、開設当初、3 年次からの専門分野として、陶芸Ⅰ（陶芸）・陶芸Ⅱ（オブジェ）・セラミックデザインの 3 つのコースから選択できるようになった。陶芸を含む工芸自体の概念やそれを取り巻く環境が時代と共に変化し、次世代を担う人材を育てる教育現場にも変化が求められた時代に、本学の陶磁専攻は新しい陶磁分野の開拓と、それを牽引する新しいリーダーとなる人材を育てるという方針を示そうとしていたことが明らかになった。

2. 収蔵資料と陶磁専攻

2019 年 3 月時点で、資料 1、2 の通り、芸術資料館で収蔵している陶磁作品は 160 件ある。しかし、この数字は、作品一つ一つを 1 件と数えているわけではなく、例えば日用食器類は、そのメーカーやシリーズで一つと数えているものも少なくないため、総点数でいくとかなりの数にのぼる。また、本学では、これらの陶磁器作品を「陶磁Ⅰ（セラミックデザイン系）」、「陶磁Ⅱ（陶芸系）」、「陶磁資料」の 3 つに分類し、収蔵している。

本学に収蔵されている陶磁器作品は、陶磁専攻が開設する 1989 年度からの 3 年間で重点的に蒐集された。開設前年、1988 年 4 月から、本学芸術資料館の芸術資料館運営委員会で、新たな教育参考品の購入が議題にあがった。運営委員会の委員には、当時の美術学部、絵画（日本画、油画）、彫刻、デザインの 4 専攻と一般教育からも選出されていた。この時点では、まだ陶磁専攻の選任教員の採用は決まっていなかったため、それぞれの専攻から購入の方針やプランを出し合い、人選が決定し次第、詳細をつめていくということで了承された。

委員会では、まず、産業系と伝統系の陶磁資料を大体半分ずつ購入するという方針が決定された。資料の収集に関しては、産業陶磁系をデザイン専攻が、伝統系を当時の一般教養（現在の芸術学を含む）が中心となって選定することとなった。また、近隣には愛知県陶磁資料館（現・愛知県陶磁美術館）があったため、陶磁資料館に所蔵されていない分野の資料で、直接学生の参考となるものを購入してはどうかという提案もなされている。デザイン専攻の河村暢夫教授が作成した陶磁器資料（案）[11] では、産業陶磁の資料として海外のデザインポリシーの明解な企業の生産品を集中的に蒐集することが望ましいとしている。そして、伝統陶磁及び陶芸に関しては、産地や陶磁史に即した作品を提案している。その後、当時、客員教授であった森や非常勤講師の加藤らからの助言もあり、初年度に購入する作品の選定と今後の購入方針が決められた。

しかし、1989 年度に入り突如、購入のための予算が削減される。それに伴い、作品の選定は大幅な変更を余儀なくされた。当時の経済状況などもあったと思われるが、減額された理由についての記載はない。11 月になってようやく、1989 年度中に購入する作品と翌年度のリストが作成された。詳細は以下のようなものである。

■ 1989 年度

〈伝統系陶磁資料〉

作者不詳　《瀬戸石皿梅文》　陶器　18 ～ 19 世紀

作者不詳　《伊万里（九谷）皿色絵文》　陶器　17 世紀

作者不詳　《呉須大平鉢》　陶器

作者不詳　《古伊万里染錦絵平鉢》　陶器

作者不詳　《須恵器壷》　陶器　6 世紀

作者不詳　《古瀬戸灰釉四耳壺》　陶器　13 世紀

〈産業系陶磁資料〉

ロイヤルコペンハーゲン　ポーセリン

リチャード　ジノリ

フッチェン　ロイター

ロールストランド

マジョリカ

アラビア

ローゼンタール A

輸入特選 A

輸入特選 B

■ 1990 年度

〈伝統系陶磁資料〉

富本憲吉　《色絵飾皿》　磁器　1955 年

作者不詳　《美濃古陶破片》　陶器　桃山時代

〈産業系陶磁資料〉

ローゼンタール B

ローゼンタール C

アラビア

そして、1990 年度に入り、次年度の購入作品の選定も以下の通り了承されている。

■ 1991 年度

〈伝統系陶磁資料〉

加藤土師萌　《辰砂仙人掌文大皿》　磁器　1955 年

〈産業系陶磁資料〉

Rut Bryk　《THE HILL》　磁器　1980 年

ヨーロッパを中心とした日常量産食器
デザインタイルシリーズ（INAX）
装飾タイル一式（志野陶石）

※陶磁資料表記順：作家名、作品名、素材、制作年

このように、初年度の伝統系陶磁資料としては、一般教育から提案されていた、瀬戸や伊万里といった各窯業地の特色があるものと、中国や韓国の代表的な歴史陶磁器、須恵器など陶磁史に即した資料が購入の対象となった。そして、イギリスに留学し、戦前から戦後にかけて、陶芸の伝統や歴史を踏まえながら独自の創作活動を行ない、日本で最初の重要無形文化財保持者（人間国宝）の一人に選ばれた富本憲吉や、1937 年のパリ万博で大賞を受賞し、1961 年、色絵磁器で富本と同じく人間国宝に選ばれた、加藤土師萌といった日本の現代陶芸の始まりを象徴する二人の作家の作品が、残りの 2 年間で選定された。現在、本学の陶磁専攻客員教授で工芸評論家・工芸史家である外舘和子によると、明治以前と大正以降の陶芸制作における違いを①個性や創作性の探求、②本格的な制作の実材主義、”実材表現の陶芸”の登場であるとし、「自身の独創的なアイディア、思想、感情、美意識や世界観を、自らの手でかたちにする陶芸家の誕生」[12] によって、日本の現代陶芸が始まったとしている。

また、産業系の資料として、プロダクトデザイナーのカイ・フランクが手がけた「キルタ」シリーズなど、ヨーロッパの量産食器類が選ばれている。そして、食器類だけでなく、芸術作品としての陶磁器にも目を向けている。19 世紀後半、イギリスに端を発したアーツ・アンド・クラフツ運動により、ヨーロッパ各地で、独自の工芸文化が花開いた。特に、北欧諸国では、スウェーデンのロールストランド製陶所やフィンランドのアラビア製陶所など、芸術性とデザイン性を兼ね備えた新しい工芸が発展した。中でも、アラビア製陶所の美術部門のデザイナーであったルート・ブリュックは、陶板から膨大なピースを組み合わせたモザイク壁画まで、幅広い作品を手がけた。そのルート・ブリュックの代表作でもある、モザイクタイルシリーズの《THE HILL》など、この 3 年間で幅広い分野の作品を蒐集した。

これ以降は、予算が許す限りでの蒐集となったが、毎年少しずつ、体系的に作品の選定を行った。1992 年度には、十三代・今泉今右衛門の《色絵薄墨薔薇文額皿》や、十四代・酒井田柿右衛門《濁手山つつじ文皿》を購入し、その卓越した技法による作品は、貴重な研究資料となっている。1993 年度からは、技法別に区分して選定していくことになり、まず、「染付技法」が選ばれた。13 ～ 20 世紀前半にかけて制作された染付技法による磁器《瀬戸染付梅草花 吹墨扁壷》（大正時代）、《瀬戸呉須印判手紅茶碗皿刷絵八角鉢セット》（昭和初期）、《瀬戸染付花鳥輪花花瓶》（明治時代）、《元・明・清 染付碗皿・蓋・陶片》、《初期伊万里陶片柿右衛門蓋》等が収蔵されている。1994 年度は、染付の中でも、「だみ技法」によるものを中心に、中国明や清の時代のものと、江戸時代から 1970 年代までの日本の染付磁器を購入した。また、デザイン系陶磁は、イッタラやフィンランドに古くからあるガラス工房ヌータヤルビのグラスウェアを選定し、テーブルウェアにおけるデザ

インのかたちを学ぶための参考資料となっている。

その後、教育参考品にかかる予算が削減され、毎年の購入が難しくなっていったが、1996 年度には、江戸末期から明治にかけての伊万里や瀬戸の赤絵を中心として、「上絵技法」による陶磁器の購入を決定した。また、戦後、名古屋の陶磁器メーカーと共同で開発した、柳宗理のデザインによるテーブルウェア類の陶磁器シリーズは、日本のモダンデザインの代表的なシリーズの一つとなっている。一方で、プロダクトデザインは、時代とともに生産が中止になったり、素材の変更があるなど、機会を逃すと手に入れることが難しいものも見られる。この柳の作品も一部生産中止や、素材の変更などが行われている。2000 年以降になると、會田雄亮や小松誠など客員教授や長島伸夫、田尻誠、栄木などの陶磁器デザイナーの作品や、2019 年 10 月に逝去した工藤省治の代表作である唐草文様の作品など、現代を代表するデザイナーの作品を幅広く蒐集している。

また、収蔵品の中には、購入されたものだけでなく、寄贈によるものも少なくない。特に教員が退任する際には、後進のための資料として、作品を寄贈いただくことがある。たとえば、任期途中で急逝された長池は、ご遺族によって、《刻銅彩掛分草藤文皿》と《刻銅彩広葉の連理草文鉢》の二点をご寄贈いただいた。また、加藤（五代目加藤作助）の《織部花弁紋鉢》も寄贈による収蔵品である。デザインの分野では、森がデザインした白山陶器のプロダクトや、三浦勇クラフトデザインの作品もあり、創造的で豊かなコレクションの形成の一助となっている。

本学は、1966 年に創立。1969 年度に初めての卒業生を輩出して以来、毎年、優秀な学生の卒業・修了制作を収蔵してきた。陶磁専攻も、1992 年度の卒業生から同様に収蔵をはじめ、2019 年 3 月で 27 期、26 名の卒業・修了生の作品を収蔵している。詳細は別紙資料 2 の通りである。染付や鉄絵を中心とした伝統系陶磁が多く選定されている。かたちや色彩、表現されているものは様々だが、基礎を着実に習得し、長久手の草花や自然をモチーフにしたものが多く見受けられる。

3. 開設以降

開設当初、1 年次は陶磁器制作に必須の基礎造形力の養成を、2 年次は陶磁器制作における基礎技法の修得をそれぞれ目標とし、前述の通り、3 年次から「陶芸Ⅰ（陶芸）」「陶芸Ⅱ（オブジェ）」「セラミックデザイン」の 3 コースに分かれて制作を行うカリキュラムが承認された。現在は、「陶芸」と「セラミックデザイン」の 2 コースに集約されている。

それに伴い、初年度は、森を教授、鯉江、加藤の 2 名を助教授として選任し、栄木、川村秀樹、鈴木康之が非常勤講師として委嘱されている。次年度は、長池と川村を専任講師として迎えた。その後、コースに分かれての制作が始まる 3 年次に向けて、栄木を助教授とし、選任教員 6 名の体制が今日まで続く。

初代教授の森は、戦後の陶磁器デザインの先駆者であり、その生涯で一貫して「日常食器の豊かさ」を追求し、国内外で高く評価された陶磁器デザイナーである。森は、1956 年に白山陶器へ入社して以来、第 1 回グッドデザイン賞を受賞した《G 型しょうゆさし》（1958）や、スペイン・バレンシア第 13 回国際工芸デザイン展工芸部グランプリを獲得した《貝の器（シェルシリーズ）》（1982）、晩年の無印良品の食器のデザインなど、量産品でありながら、手仕事の温かみも残したデザインで

知られている。森のデザインは、発売から年月が経った現在でも色褪せることのないものとして人気を博している。工芸にデザインという視点を取り入れつつ、それを量産化にまで結びつける森の手腕は、日本における陶磁器デザイナーの先駆けとなった。 本学の陶磁専攻の理念や理想を体現する貴重な存在であったことは間違いない。

2002 年に岐阜県現代陶芸美術館の開館記念展 I「現代陶芸の 100 年　第一部　日本陶芸の展開」では、濱田庄司や富本ら日本の現代陶芸の系譜とともに、森、内田、工藤、小松、栄木、田尻など、本学に携わる陶磁器デザイナーの作品も紹介されている。森らの活躍によって、それまで裏方でしかなかった陶磁器デザイナーの存在が、広く知られるようになっていく。 2019 年 2 月に急逝した栄木も、森と同時期に陶磁専攻で教鞭を執っていた。森のティーポットを見てデザイナーになろうと決意した栄木は、瀬戸を拠点とし、伝統的な技法を用いながら、それを新しいデザインに取り入れたユニークな作品を制作してきた。外舘は、カタログに寄稿し、栄木について「産地から発信する独創性と国際性という 21 世紀の陶磁デザインの重要な方向性をみることができる」[13] と評している。

その後は、ドイツでデザインを学んだ長井千春をはじめ、プロダクトデザインの友岡秀秋、本学の卒業生である田上知之介が後進の指導にあたっている。

また、伝統系は、加藤や長池、太田公典など、伝統的な技法を踏まえつつ新しい陶芸のかたちを生み出し高い評価を受けた作家を教員として採用している。その後、伝統工芸だけでなく幅広い制作スタイルで色絵磁器の制作を行う梅本孝征、本学を卒業した佐藤文子、小枝真人が加わり、先代の教員たちとは又違ったアプローチで素材やモチーフを探求し、新たな陶磁専攻のかたちを作り出そうと模索している。

おわりに

以上のように、本学に残された資料や、時代背景などをもとに陶磁専攻のあゆみを考察してきた。開設に向けて議論されていた当時は、セラミック産業やデザインへの注目が高まっており、本学の陶磁専攻も、デザインを含めた総合的かつ陶磁器の裾野を広げることが求められた。工芸や陶磁器に対しての認識が変わってきた時代に、本学が陶磁専攻を開設したのは大変意義のあることであった。30 年が経った今、陶磁器を含めた工芸には、これまでとは違う課題や新しい分野への挑戦が見られる。これからも新しい世代が、従来の枠にとらわれない陶磁器の分野を作り出すことが期待される。

註

[1] 昭和 58 年 12 月 16 日（教授会）臨時にて「陶芸の設置について」が議題としてあげられた

[2] 陶芸専攻から陶磁専攻への変更が了承されたのは、1985 年 1 月のこととあるが、「「陶芸専攻を陶磁専攻にした理由」昭和 61 年 2 月 5 日（水）」と記載された資料と、「昭和 61 年 1 月 28 日 陶芸専攻を陶磁専攻に変更した理由」というメモが残されている。変更から 1 年も経って、理由書が作成されるにいたった理由などは特に記されていない。

[3] 愛知県立芸術大学広報（入試）委員会監修『愛知県立芸術大学　大学案内　2019-2020』2019 年、31 頁

[4] 中日新聞（夕刊）『愛知県立芸大に新設』昭和 63 年（1988 年）6 月 23 日（木曜日）2 面

[5] 中日新聞『地元陶芸家を助教授に　愛知県立芸術大新設の陶磁専攻』1989 年（平成元年）2 月 16 日（木曜日）28 面

[6] 中日新聞『陶磁専攻の実習棟完成　県立芸大』1990 年（平成 2 年）4 月 20 日（金曜日）16 面

[7] 「陶磁器専攻新設構想」について（1983 年頃）。この資料が作成された日時についての記載はない。「陶芸専攻新設関係」というラベルでまとめられたファイルには、ナンバリングがされており、資料が年代順に綴じられている。そこから推測すると、まず、1983 年 12 月 16 日に陶芸（陶磁）専攻の設置について教授会で発表される前に、12 月 1 日付で「愛知県立芸術大学課程新設構想（試案）」が作成される。そこには 1986 年 4 月の開設とある。その後 1984 年 1 月の日付で新たに「愛知県立芸術大学課程新設構想（試案）」が作成され、1988 年 4 月の開設が見込まれている。このことから、最初の試案を作成ののち短期間ではあるが、議論が交わされた際の資料であると推測される。

[8] この資料が作成された日時についても記載はない。しかし前述の「愛知県立芸術大学課程新設構想（試案）」の前に綴じられた資料であるため、構想を議論した際に出てきた問題点をあげたと考えられる。

[9] 「陶芸専攻設置準備委員会記録」（別紙資料）　委員会開催日：1984 年 6 月 21 日

[10] 「陶磁専攻設置準備委員会記録」（別紙資料②：「愛知県立芸大　陶磁専攻　カリキュラム案」）　委員会開催日：1985 年 7 月 4 日

[11] 「第 46 回芸術資料館運営委員会議事録 」（開催日：1988 年 5 月 13 日（金））に「陶磁器資料（案）作成デザイン専攻河村 63.5/13」と書いた資料が付されていた。この委員会の資料として出されたものと推測される。

[12] 外舘和子『日本近現代陶芸史』阿部出版、2016 年、28 頁

[13] 外舘和子「独創的なデザインをデザイナー自身の名で―栄木正敏の挑戦―」（栄木正敏『栄木正敏セラミックプロダクト』風媒社、2016 年、10 頁）

参考文献

愛知県企画部統計課編『統計からみた愛知の陶磁器―生産動態統計調査（陶磁器月報）累年統計表―』昭和 62 年 3 月
京都市立芸術大学百年史編纂委員会『百年史　京都市立芸術大学』京都市立芸術大学、昭和 56 年
芸術資料館蔵品図録編集委員会編『芸術資料館蔵品図録』愛知県立芸術大学、1995 年
栄木正敏『栄木正敏セラミックプロダクト』風媒社、2016 年
外舘和子『日本近現代陶芸史』阿部出版、2016 年
東京国立近代美術館編『新版　近代工芸案内－名品選による日本の美－』東京国立近代美術館、2015 年
矢部良明監修『増補新装【カラー版】日本やきもの史』美術出版社、2018 年
山口敦子編『フィンランド陶芸　芸術家たちのユートピア』展覧会図録、国書刊行会、2018 年

ホームページ

東京藝術大学「沿革・歴史」（最終閲覧日：2019 年 12 月 16 日）
https://www.geidai.ac.jp/outline/introduction/history
金沢美術工芸大学「沿革」（最終閲覧日：2019 年 12 月 16 日）
https://www.kanazawa-bidai.ac.jp/about/history/

資料1

受入年度（年度）		番号	作家名	作品名	制作年	材質・技法・形状	備考
1989	陶磁Ⅰ セラミックデザイン系	陶Ⅰ001	Grethe Meyer	ブルーライン一式		硬質陶器	デンマーク ロイヤルコペンハーゲン社
		陶Ⅰ002	Hertha Bengtson	コカブルー 一式		磁器	スウェーデン ロールストランド社
		陶Ⅰ003	Wolf Karnagel	タボラビアンカー式		磁器	ドイツ フッチェンロイター社
		陶Ⅰ004	Bjφrn Wiinblad	ロマンスホワイト一式		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ005	Timo Sarpaneva	スタジオライン"スオミ"ホワイト 一式		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ006	Bjφrn Wiinblad	スタジオライン"ツァウバフルート"ゴールド一式		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ007	Mario Bellini	スタジオライン"キュボラ"ブラック 一式		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ008	Walter Gropius	スタジオライン"グロピウスブラック 一式		磁器	ドイツ ローゼンタール社
	陶磁資料	陶資001	不詳	伊万里染錦絵平鉢		陶器	
		陶資002	不詳	藍呉須大平鉢		陶器	
		陶資003	不詳	瀬戸梅文石皿	18～19世紀	陶器	
		陶資004	不詳	藍九谷色紙文皿	17世紀	陶器	
		陶資005	不詳	古瀬戸灰釉四耳壷	13世紀	陶器 桐箱付	
		陶資006	不詳	須恵器壷	6世紀	陶器 桐箱、台付	
		陶資007		フローラダニカ 一式		磁器	デンマーク ロイヤルコペンハーゲン社
		陶資008		ブルーフルーテッド プレイン 一式		磁器	デンマーク ロイヤルコペンハーゲン社
		陶資009		アンティコ・ドッチア イタリアンフルーツ一式		磁器	イタリア リチャードジノリ社
		陶資010		インペロ 一式		磁器	イタリア リチャードジノリ社
		陶資011		マジョリカ一式		陶器	イタリア マジョリカ社
		陶資012		ジャスパー一式		磁器	イギリス ウェッジウッド社
		陶資013		ピーターラビット一式		磁器	イギリス ウェッジウッド社
		陶資014		ブルーオニオン一式		磁器	ドイツ マイセン社
		陶資015		タイレ一式		ステンレスカトラリーセット デザイン：Tapio Wirkkala	ローゼンタール社
		陶資016		カントリーウェアー式		磁器	イギリス ウェッジウッド社
		陶資017		ワイルド・ストローベリー 一式		磁器	イギリス ウェッジウッド社
		陶資018		オータム一式		磁器(酸化磁器)	アメリカ レノックス社
		陶資019		ハドンホール一式		磁器(Bone China)	イギリス ミントン社
		陶資020		ビレロイ&ボッホ一式		硬質陶器	ドイツ ビレロイボッホ社
		陶資021		ロイヤルコペンハーゲン 一式		磁器	デンマーク ロイヤルコペンハーゲン社
		陶資022		ブルーフルーテッド / フルレース一式		磁器	デンマーク ロイヤルコペンハーゲン社
		陶資023		ロイヤルキャッツ 一式		磁器	イギリス ロイヤルクラウンダービー社
		陶資024		セーブル 一式		磁器	フランス セーブル社
1990	陶磁Ⅰ セラミックデザイン系	陶Ⅰ009	Bjφrn Wiinblad	スタジオライン "シェヘラザード"		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ010	Mario Bellini	スタジオライン"キュボラ"ホワイト		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ011	Bjφrn Wiinblad	クラシックローズ"ロマンス"テーブルウェア		ガラス、ステンレス カトラリーセット	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ012	Anbrogio Pozzi他	スタジオライン アーティストカップコレクション		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ013	Lino Sabattini他	スタジオライン アーティストカップコレクション		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ014	Anbrogio Pozzi他	スタジオライン インテリア花瓶		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ015	Kaj Franck	テーマ一式		硬質陶器	フィンランド アラビア社 コーヒーカップ＆ソーサー
		陶Ⅰ016	Birger Kaipiainen	バラティッシ BKLシェーブ一式		硬質陶器	フィンランド アラビア社 チューリン
		陶Ⅰ017	Ulla Procopé	ルスカ Sシェイブ一式		ストーンウェア	フィンランド アラビア社
		陶Ⅰ018	Inkeri Leivo	レッド・ハット一式		硬質陶器＋金属	フィンランド アラビア社
		陶Ⅰ019	Inkeri Leivo	セイタ・アルクテッカ 一式		硬質陶器	フィンランド アラビア社
		陶Ⅰ020	Ulla Procopé	バレンシア NDシェーブ 一式		硬質陶器	フィンランド アラビア社
	陶磁Ⅱ 陶芸系	陶Ⅱ001	富本憲吉	色絵 飾皿	1955年	磁器	
	陶磁資料	陶資025	不詳	美濃古陶破片	桃山時代	陶器	
1991	陶磁Ⅰ セラミックデザイン系	陶Ⅰ021	Marcello Morandini	スタジオライン"モランディーニ・アルファベット"白花瓶		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ022	Bjφrn Wiinblad	スタジオライン"ツァウバフルート"ゴールド ケーキ皿		磁器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ023	James Kirkwood	ティーフォーツー		陶器	ドイツ ローゼンタール社
		陶Ⅰ024	Rut Bryk	THE HILL	1980年	磁器	フィンランド アラビア社
	陶磁Ⅱ 陶芸系	陶Ⅱ002	加藤土師萌	辰砂仙人掌文大皿	1955年	磁器 箱付	
	陶磁資料	陶資027		ボールダニカ 20-3054		磁器 皿立付	デンマーク ロイヤルコペンハーゲン社
		陶資028		大鉢1060		磁器 皿立付	オランダ ロイヤルデルフト社
		陶資029		インペロ一式		磁器	イタリア リチャードジノリ社
		陶資030		ジャパン一式		磁器	イギリス ロイヤルクラウンダービー社
		陶資031		ティー椀皿ファットブルー 869JM		磁器	フランス セーブル社
		陶資032		デザインタイルシリーズ		陶器、ストーンウエア	イタリア他 INAX
		陶資033	Nino Caruso et al.	装飾タイル一式		陶器、ストーンウエア	イタリア他
		陶資026		ルージュフランベ 1619		磁器 花瓶	イギリス ロイヤルドルトン社
1992	陶磁Ⅱ 陶芸系	陶Ⅱ003	十三代今泉今右衛門	色絵薄墨薔薇文額皿		陶器	
		陶Ⅱ004	十四代酒井田柿右衛門	濁手山つつじ文皿		陶器	
1993	陶磁資料	陶資034		染付牡丹桜籠紋図大皿	18世紀		
		陶資035		瀬戸染付梅草花 吹墨扁壷	大正時代		菱勘製銘
		陶資036		瀬戸呉須印判手紅茶碗皿刷絵八角鉢セット	昭和初期		日本瀬戸陶玉園加藤五助製銘
		陶資037		瀬戸染付花鳥輪花花瓶	明治時代	四足台添	大日本山勇製銘
		陶資038		元・明・清 染付碗皿・蓋・陶片	元・明・清時代	陶器	
		陶資039		初期伊万里陶片柿右衛門蓋 等		陶器	
1994	陶磁Ⅰ セラミックデザイン系	陶Ⅰ025	森正洋	奏楽堂舞台の為の組合せ大型花器一式	1993年	陶器	森正洋氏寄贈
		陶Ⅰ026	森正洋	白山陶器製品一式		L型パーティーセット (磁器、青白磁) 1983年～ ほか	森正洋氏寄贈 白山陶器㈱
		陶Ⅰ027	Tapio Wirkkala他	グラスウエアー 一式		ガラス	フィンランド イッタラ社 ヌータヤルビ社
	陶磁Ⅱ 陶芸系	陶Ⅱ005	長池潤一（順一）	刻銅彩掛分草藤文皿	1993年	陶器	長池和子氏寄贈
		陶Ⅱ006	長池潤一（順一）	刻銅彩広葉の連理草文鉢	1993年	陶器	長池和子氏寄贈
	陶磁資料	陶資040		染付陶磁 一式		山水梧桐高士紋香炉ほか	
1996	陶磁Ⅰ セラミックデザイン系	陶Ⅰ028	柳宗理	ヘリテイジ YANAGI シリーズ一式		ボーンチャイナ 11種29点	
		陶Ⅰ029	柳宗理	PLATES 一式		磁器、ステンレス、ガラス21種33点	
	陶磁資料	陶資041		赤絵花紋大皿	江戸末期		
		陶資042	不詳	赤絵花鳥紋鉢	江戸末期	伊万里	
		陶資043	不詳	赤絵花紋鉢	中国明時代 (萬歴)	呉須赤絵	
		陶資044	不詳	色絵中皿	明治初期	伊万里焼 3枚セット	
		陶資045	不詳	釉裏紅花紋鉢	江戸末期	瀬戸	
		陶資046	柳宗理	カトラリーセット一式		18-8ステンレス艶消し仕上げ23点 ミラー9点、黒柄11点	
		陶資047	柳宗理	鏡一組		小判型鏡大小2枚	
1997	陶磁Ⅰ セラミックデザイン系	陶Ⅰ030	松木優帆	吹きガラス器 31点		20種	デザイン専攻の選定による購入
		陶Ⅰ031	内田邦夫	内田邦夫陶器工房作品一式		白釉コーヒーポット、白釉急須ほか	
1998	陶磁Ⅰ セラミックデザイン系	陶Ⅰ032	船越三郎	船越三郎のグラスウェアシリーズ一式		ガラス24種 26点	
	陶磁資料	陶資048	不詳	小壷	新羅時代	韓国における陶磁器	
		陶資049	不詳	細首花入	李朝時代	韓国における陶磁器	
		陶資050	不詳	花紋壷	李朝時代末期	韓国における陶磁器	
		陶資051	不詳	高麗・李朝陶片	高麗・李朝時代	韓国における陶磁器	

1999	陶磁Ⅰ セラミック デザイン系	陶Ⅰ033	三浦勇	角　ナイトランプ（生命の木パターン）トルコ青釉透し	1970年	低火度陶器	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ034	三浦勇	パーティートレー（角）あい彩	1995年	炻器	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ035	三浦勇	角　酒器（かんびん）焼締　なまこ釉	1996年	陶器	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ036	三浦勇	φ25トレー染付（生命の木パターン）白釉	1970年	炻器、白釉結晶、染付	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ037	三浦勇	タイル（4枚合せ）初露一服用　釉彩	1995年	初露一服、敷タイル	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ038	三浦勇	銘々皿（初露一服用）　緑彩	1995年	緑彩	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ039	三浦勇	ようじ置（魚）　鉄彩白釉	1995年	鉄彩白釉	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ040	三浦勇	ゆのみ　緑彩	1995年	白釉緑彩	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ041	三浦勇	ピッチャー　緑彩	1993年	陶器	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ042	三浦勇	オードブルトレー　透し磁器	1976年	磁器	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ043	三浦勇	角トレー（サンドウッチ）白釉彩色	1996年	炻器、白釉結晶釉	三浦勇氏寄贈
		陶Ⅰ044	三浦勇	三浦勇のクラフトデザイン一式		陶器、炉器、白結晶釉、 染付、なまこ釉彩ほか 18種19点	
2000	陶磁Ⅰ セラミック デザイン系	陶Ⅰ045	小松誠	小松誠のプロダクトデザイン一式		磁器、アルミ鋳物、ガラス、 ステンレススチール 56種69点	
	陶磁資料	陶資052	井上延年	染付菊花図小壷	明治時代中期 （19世紀後期）		日本瀬戸井延年製銘
		陶資053	加藤勘四郎	染付草花図ランプスタンド	明治時代中期 （19世紀後期）		大日本菱勘製銘
		陶資054	加藤三平（三代）	染付花鳥図竹籠花瓶	明治時代中期 （19世紀後期）		
2002	陶磁Ⅱ 陶芸系	陶Ⅱ007	藤本能道	色絵鵜図陶筥	1985年頃	磁器　上絵	
2005	陶磁Ⅰ セラミック デザイン系	陶Ⅰ046	權五勳	花器	2002年		權五勳氏寄贈
		陶Ⅰ047	權五勳	ボーンチャイナテーブルウェア　カップ＆ソーサー	2002年		權五勳氏寄贈
2006	陶磁Ⅱ 陶芸系	陶Ⅱ008	加藤作助	織部花弁紋鉢	2004年	陶器	加藤作助氏寄贈
2007	陶磁Ⅰ セラミック デザイン系	陶Ⅰ048	會田雄亮	練込食器セット時雨シリーズ	1980年代初～	陶器　作品14点	
		陶Ⅰ049	會田雄亮	練上積層「月蝕」	1991年	陶器　1点	
		陶Ⅰ050	會田雄亮	陶織シリーズの内（作品1点）	2006年	磁器　1点	
		陶Ⅰ051	長島伸夫（デザイン）	長島伸夫デザインZ型ディナーウェアー作品9点	1970年	ボーンチャイナ（磁器） 作品12点	
		陶Ⅰ052	田尻　誠	陶房田尻の食器シリーズ　作品17点	1980年	陶器	
		陶Ⅰ053	工藤省治	工藤省治の染付と白磁シリーズ	1980年～	磁器7点	
		陶Ⅰ054	新田つぎ	長皿「線満々」作品8点	1991年	磁器8点	
		陶Ⅰ055	三輪雅章	急須2種	1980年～	炻器2点	
2010	陶磁Ⅰ セラミック デザイン系	陶Ⅰ056	栄木正敏	醤油・ソース入れ「EN」	2000年デザイン	3点	
		陶Ⅰ057	栄木正敏	テーブルウェア「WAVE」	1986～87年	21点	
		陶Ⅰ058	栄木正敏	青白磁の器シリーズ	2000年デザイン	8点	
		陶Ⅰ059	栄木正敏	ハンドルの器シリーズのティーポット	2004年デザイン	2点	
		陶Ⅰ060	栄木正敏	カップ＆ソーサーC＆S	2004年デザイン	3点	
		陶Ⅰ061	栄木正敏	ハンドルの器シリーズ	1994年、2003年 デザイン	5点	
		陶Ⅰ062	栄木正敏	ストーンウェア和＆洋「Drip」	1988年デザイン	21点	
		陶Ⅰ063	栄木正敏	COMPACTシリーズ（白・黒）一式	1984年デザイン	15点	
		陶Ⅰ064	栄木正敏	天目ディナーウェアー	1979年デザイン	10点	
		陶Ⅰ065	栄木正敏	しずくフォルムシリーズ COMBI組み合わせプレート	1999年デザイン	26点	
		陶Ⅰ066	栄木正敏	ユニバーサルデザイン メラミンウェアS43マグカップ	1989年デザイン	4点	
		陶Ⅰ067	栄木正敏	パブリックユースQ－su　メラミンウェア	1988年デザイン	4点	
		陶Ⅰ068	栄木正敏	しずくフォルム「藍の線」	2000年デザイン	5点	
		陶Ⅰ069	栄木正敏	CLAY　WAVE　ディナーウェアー	1987年デザイン	14点	
2015	陶磁Ⅱ 陶芸系	陶Ⅱ009	田村耕一	鉄絵梅文大皿	1960年	陶器	
		陶Ⅱ010	田村耕一	鉄釉野草文大皿	1962年	陶器	

※2019年3月現在

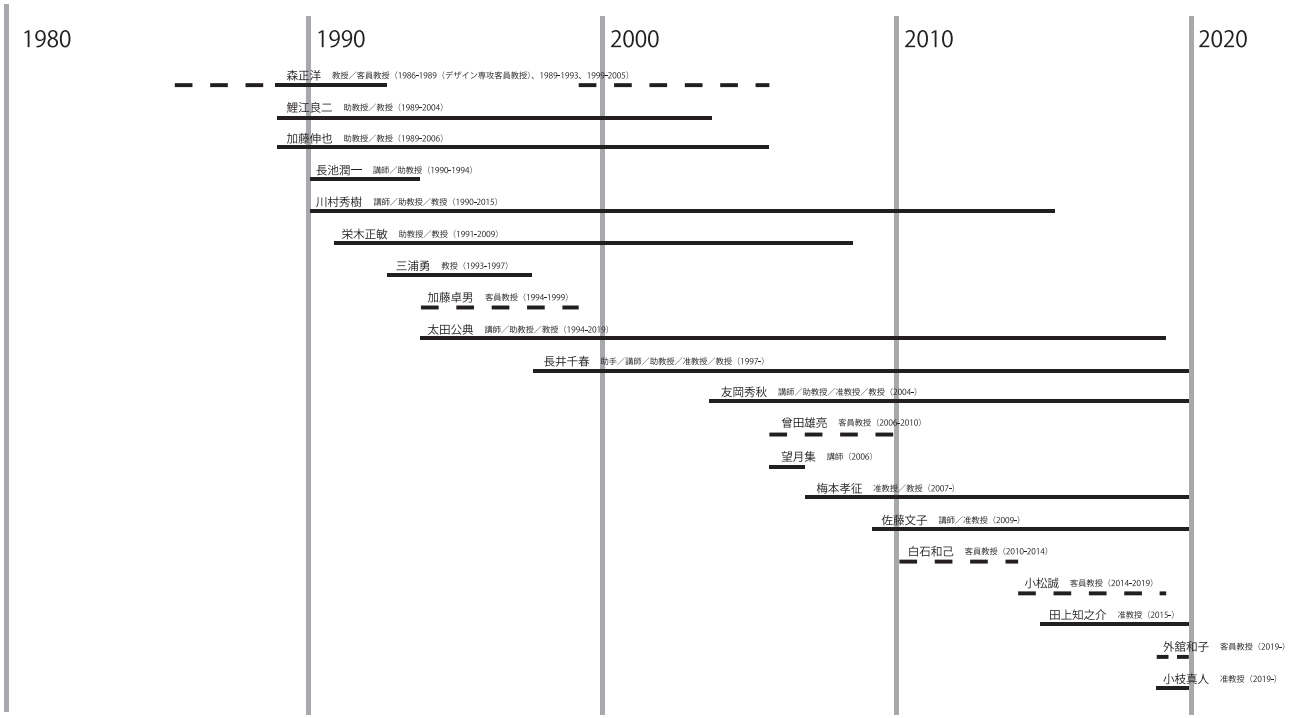
資料 2

卒業・修了年度	作家名	作品名	材質・素材
1992 年度	長尾明理	大皿　辰砂木蓮文	磁器
		大皿　染付紫陽花文	
		大皿　上絵椿文	
1993 年度	金子明子	鉄絵草花紋大皿	陶器
		鉄絵山吹紋大皿	
		鉄線紋大鉢	
1994 年度	池戸みかる	青葛藤紋鉢	磁器
		虎尾紋鉢	
		草花紋鉢	
1995 年度	尹相鍾	ガーデンビールパーティーセット	磁器
	金子明子	むらさきしきぶ文大皿	陶器
		山吹文大皿	
		山法師文大鉢	
1996 年度	大谷昌拡	染付山法師文花器	磁器
		椿文鉢	
		花水木筥	
1997 年度	大谷小津絵	長久手の草花たち	磁器
1998 年度	黒河兼吉	The stacking lamp	
1999 年度	小形こず恵	椿紋土瓶	磁器
		こぶし紋土瓶	
		どくだみ紋ポット (大)	
		どくだみ紋ポット (小)	
		蠟梅紋急須	
		椿紋急須	
2000 年度	小枝真人	染付芙蓉紋鉢	磁土
		染付紫木蓮紋鉢	
		染付石榴紋鉢	
2001 年度	明石拓馬	白木蓮紋大鉢	磁器
		藤紋大皿	
		白木蓮紋六角皿其 1 ～其 6	
2002 年度	成龍直	タイル	パネルに陶片の貼り付け
2003 年度	該当なし		
2004 年度	和田すみれ	かざぐるま文鉢	陶器
		苦瓜文皿	
		牡丹文組皿	
		草花文組皿	
		桔梗文組皿	
2005 年度	李地右	葛図壷	陶器
		萩図皿	
		葡萄図鉢	

2006 年度	長尾正子	椿の図陶板	磁土
		牡丹紋鉢	
		牡丹紋陶筥	
		十二ヶ月揃酒杯	
2007 年度	小池夏美	biscuit―なみうつー	白磁、白雲土
2008 年度	福島由子	陶筥「山桜」	陶土
		角筥「梅花空木」	
		角筥「椿」	
		角筥「紫露草」	
2009 年度	畑直子	あかいやま	磁器
2010 年度	兪期天	染付蓮紋壷	磁器
		染付南天紋壷	
		染付椿紋壷	
2011 年度	久野笑加	美男葛紋四角陶筥	磁器
		山茶花紋四角陶筥	
		夏椿紋八角陶筥	
		泰山木紋陶筥	
		小手毬紋四角陶筥	
2012 年度	中島未沙	山法師図組皿	陶土、弁柄
		山法師図大皿	
		どくだみ図大皿	
2013 年度	倉知栞里	aris	磁器
2014 年度	明石朋実	釉はじき染付陶筥―花舞う―	磁器
		ポピー紋陶筥	
		釉はじき染付陶筥―弾む―	
2015 年度	柄澤あかり	流下破層文花器	陶土、含有土石顔料彩色
2016 年度	張多然	Blossom Teapot Set	磁器
		Collection Cafécup&Saucer	
2017 年度	宮下陽	街文花器 rust-down	磁器
		街文鉢 rust-tasogare	
2018 年度	滝本汐里	あの日の景色―そよ風―	白磁
		あの日の景色―つぼみ―	
		あの日の景色―花―	

※ 作家名は卒業・修了当時のものを使用

陶磁専攻の軌跡



※ 破線は客員教授をあらわします

1984　愛知県立芸術大学陶磁専攻設置準備委員会発足

1989　陶磁専攻開設

陶芸Ⅰ・陶芸Ⅱ・セラミックデザインの 3 コース（3 年次から実施）

森正洋教授、鯉江良二助教授、加藤伸也助教授の 3 名の教員と 10 名の学生からはじまる

1990　初年度窯場棟から始まり、現状の建築が完成

川村秀樹講師、長池潤一講師着任

1991　栄木正敏助教授着任

1993　修士課程設置

森正洋教授退任、三浦勇教授着任

1994　太田公典講師着任

1997　三浦勇教授退任、長井千春助手着任

2004　陶芸コースとセラミックデザインコースの 2 コースになる

鯉江良二教授退任、友岡秀秋講師着任

2006　加藤伸也教授退任、望月集講師着任

2007　梅本孝征准教授

愛知県陶磁資料館（現 愛知県陶磁美術館）で「愛知県立芸術大学収蔵品展ー芸大で学んだ若き陶芸作家たち」を開催

2009　栄木正敏教授退任、佐藤文子講師着任

2010　瀬戸市美術館で「陶芸＆陶磁器デザインー愛知県立芸術大学陶磁専攻の 20 年ー」を開催

愛知県陶磁資料館（現 愛知県陶磁美術館）で「愛知県立芸術大学陶磁専攻 教育と創作展」を開催

2015　川村秀樹教授退任、田上知之介准教授着任

2016　CERAMIC LIFE DESIGN AWARD（CLDA）開始
セラミックライフデザインアワード、神戸財団共催

2017　Ceramic Design from Japan. Graduate’ s Works Exhibition in Malaysia.

2018　国立ソウル科学技術大学と協定を締結

古川美術館、名古屋栄三越で「愛知県立芸術大学陶磁専攻柏会 30 周年記念展ー柏会の軌跡ー」を開催

2019　太田公典教授退任、小枝真人准教授着任